

・**プーランク (1899~1963) ノヴェレッテ第1番**

ドビュッシーやラヴェルに比べるとその知名度は劣ると思いますが、実を言いますと、私はこのフランシス・プーランクの美しいピアノ曲を、長い間皆様に聴いて頂きたいと思ってきました。1927年の作品で、タイトルの「ノヴェレッテ」とは、元々文学の用語で短編小説を意味します。その言葉をシューマンが初めて自作のピアノ曲で使いました。短編小説という言葉に相応しく、短くシンプルですが、豊かなストーリーの展開と、美しく満足できる結末を持っていますので、初めての方にも楽しんでいただけると思います。

・**ラヴェル (1875~1937) 道化師の朝の歌～組曲「鏡」より**

本日の最後は、再びラヴェルの世界に戻り、やはり彼の代表作の一つである、「道化師の朝の歌」をお聴きいただきたいと思います。ラヴェルは母方のルーツも非常に意識しており、スペインに題材を取った作品をいくつか残しています。この曲もその一つで、夜の酒場での仕事が明けた早朝の路地裏に佇むピエロの、半分酔いの残ったままの意識に訪れた、記憶とも妄想とも現実ともつかぬ世界が、巧みな筆致によってピアノの音で描かれています。終盤にはその幻想も思わず展開を見せ、スペインらしい情熱的な喧騒の中、華やかに曲を閉じます。

(プログラム・ノート: 東誠三)

東 誠三 (ピアノ) SEIZO AZUMA

本格派ピアニストとして、真摯なアプローチから生まれる洒脱な音色と生命力あふれるダイナミズムによって、常に高い評価を得ている。

1962年生まれ。スズキ・メソードでピアノを始め、東京音楽大学付属高校から東京音楽大学に進み、井口愛子、野島稔、中島和彦の各氏に師事。1983年、第52回日本音楽コンクール第1位。同校卒業とともに、フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院に留学し、J・ルヴィイ工氏に師事する。日本国際、モントリオール(カナダ)、カサドシュ(アメリカ)、ポツツォーリ(イタリア)など、数多くの国際コンクールに優勝・入賞し、演奏活動に入る。これまでに、ヨーロッパ、北米、中国でリサイタル、オーケストラと共に演奏。国内ではそのスケールの大きな演奏によりN響、読売日響、日本フィル、東京都響、大阪センチュリー響、名古屋フィル、仙台フィル、神奈川フィル、九州響、山形響、オーケストラ・アンサンブル金沢など、主要オーケストラにソリストとして招かれ、好評を博す。98年には、「ショパン 24の前奏曲」の演奏で“この弾き手にしかできないゆるぎない解釈”との高い評価を受け、第24回ショパン協会賞を受賞。ソロ活動の一方、室内楽にも強い意欲を示し、東京フィルコンサートマスター、三浦章広(Vl)、N響首席、藤森亮一(Vc)と結成した「ボアヴェール・トリオ」での活動をはじめ多くのソリストたちと共に演奏し、絶妙なコラボレーションを聴かせている。2008年より2012年にかけて、全8回のベートーヴェン:ピアノ・ソナタ全曲演奏会を開催。2012年11月には、ジュネーヴ国際音楽コンクール・ピアノ部門の審査員に招かれた。

CDは、リスト・ピアノ曲集、ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ全曲演奏会シリーズのライブ録音などを、エプソン・クラシックCDコレクションとしてリリース。いずれもレコード芸術誌にて特選盤、準特選盤に選ばれるなど、高い評価を受けている。また「前橋汀子～ヴァイオリン名曲100選」(ソニーミュージック)をはじめ、共演盤も数多い。

現在は、活発な演奏活動に加え、東京藝術大学教授を務める他、東京音楽大学特任教授、スズキ・メソード特別講師として、後進の指導も行っている。また近年、日本音楽コンクールをはじめ、数々のコンクールの審査を務めるほか、フランスの「MuicaAlp」夏期音楽アカデミー&フェスティバルに招かれている。日本ショパン協会 理事。



© Ariga Terasawa

Profile

2023 湘南アフタヌーン・コンサート

AFTERNOON PIANO CONCERT

東 誠三

Seizo Azuma

～ フランス・ピアノ音楽の小径 ～



写真:イメージマート

2023.11月26日(日) 開演 14:30

逗子文化プラザ なぎさホール

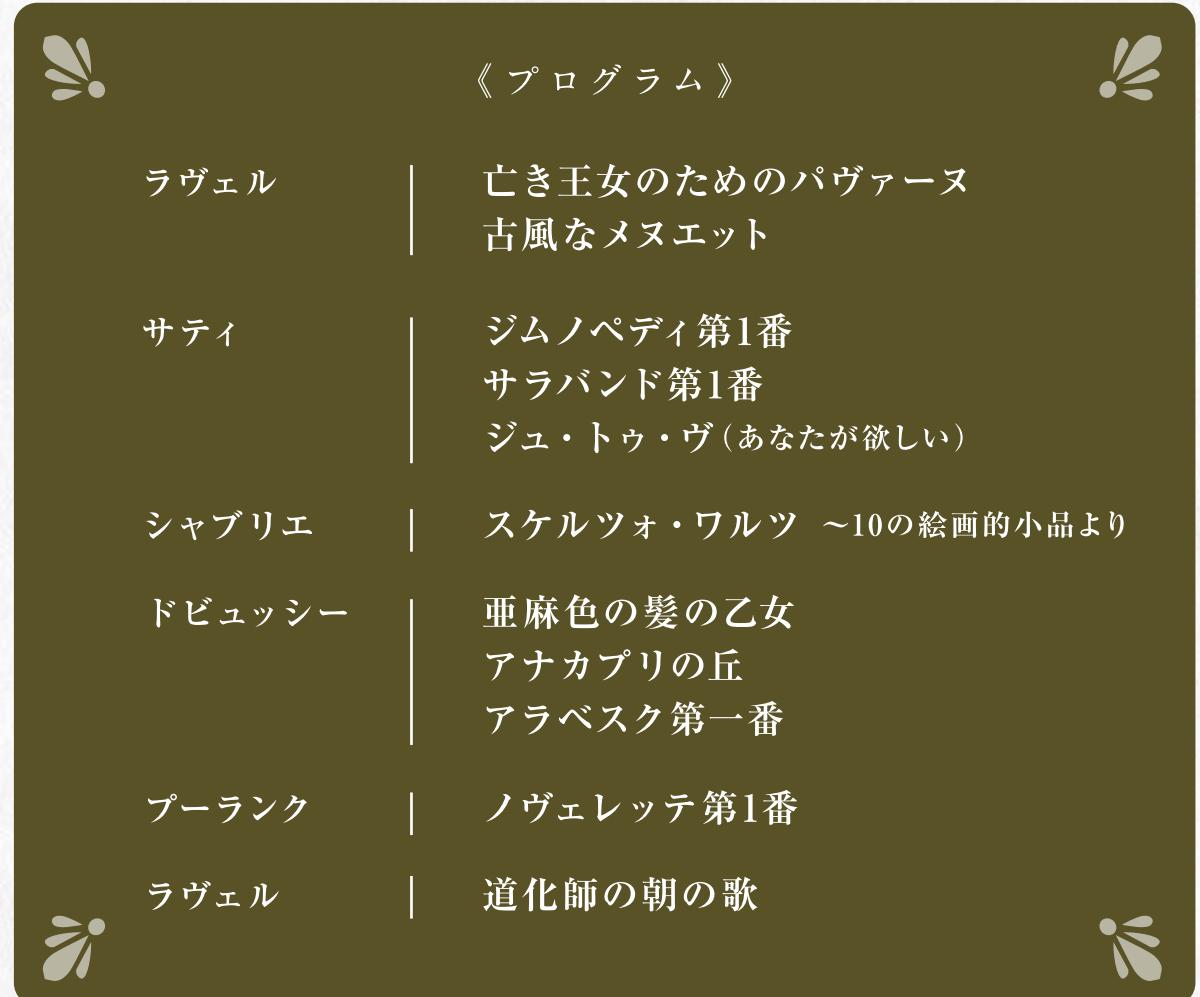
主催: 東誠三 逗子リサイタル 実行委員会

後援: 逗子市、逗子市教育委員会、葉山町、横須賀市、鎌倉市、東誠三「友の会」、FMヨコハマ・ピアノワイナリー

ご挨拶

皆さま、本日は、湘南アフタヌーン・コンサート～フランス音楽の小径（こみち）～において頂きありがとうございます。2020年のコロナ禍の中からスタートした、このトークと演奏の映写付きのコンサートですが、お陰様を持ちまして、今年もまた開催することができますことに、深い感謝の念を抱いております。ひとまずコロナによる大きな制限も解けて、世の中はコロナ前に大分戻ってきたように思いますが、一方隣の大陸の遙かなる地では不幸にも混迷の度合いがさらに増すという事態も起こっております。予測し難い世の中の情勢ではありますが、本日は、かつてフランスの作曲家たちが、ピアノという楽器に託したイメージが結実した作品たちを皆様とご一緒にたどり、共有し楽しんで参りたいと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

東 誠三



曲目解説

・ラヴェル（1875～1937） 亡き王女のためのパヴァーヌ

モーリス・ラヴェルは、フランスの南西部に位置するスペイン国境に近い街、シブルーで生まれました。母方のバスクとそれに連なるスペインの気質と父方のスイスの気質の両方を受け継いだ彼の作風は、精密さと人間的な感動が非常に高い次元で融合した、他に類をみない音楽の世界を形作っています。この曲は、1899年に作曲され、誰か特定の人物の死を悼んだものではなく、「その昔スペインの宮廷で小さな王女（プリンセス）が踊っているイメージ」が表されたものだ、という本人のコメントが伝えられています。パヴァーヌは16～17世紀にヨーロッパの宮廷でよく踊られたゆったりとしたテンポを持つ踊りです。

・ラヴェル（1875～1937） 古風なメヌエット

前曲のパヴァーヌに遡ること4年、まだパリ音楽院の学生だった時代に書かれた曲です。メヌエットは、パヴァーヌと同じように主に宮廷で流行した踊りですが、それが流行したのは、17～18世紀にかけてでした。当時まだ若いラヴェルの生きていた時代から見ても少なくとも100年以上前のことですから、充分古風＝アンティークな、という言葉が当てはまるでしょう。このいにしえ感のあるリズムと形式に、彼は、当時の現代的な響きと展開を盛り込み、活気と美しさあふれる「現代のメヌエット」を作り出しています。

・サティ（1866～1925） ジムノペディ第1番/サラバンド第1番/ジュ・トゥ・ヴ（あなたが欲しい）

エリック・サティはフランス人の海運業を営む父と、イギリス人の母の間に、パリから北西に200kmほどの美しい港町オーヌフルールに生まれました。アカデミックな世界とは距離を置き、主に当時のパリで流行っていたキャバレー（居酒屋と寄席が合体したような業態）を主な活動の場とし、当時の最先端の芸術家たちと広く交流していました。「梨の形をした3つの小品」など、不思議なタイトルを持つ作品や、延々とある一つの音形を繰り返すなど、のちに前衛と呼ばれる、多くの考え方や方法を編み出し実際の作品に残した作曲家として、ラヴェルをはじめ、のちに続く作曲家たちに絶大な影響を与えたしました。今日はそのサティの作品から、まさにのどかな秋の散歩のようなジムノペディ第1番、少し哲学的な空気も漂う不思議な世界観のサラバンド第1番、そして、猥雑な喧騒が似合う、当時のパリの世相が最も表れる、ジュ・トゥ・ヴの3曲をお聴きいただきます。

・シャブリエ（1841～1894） スケルツオ・ワルツ～10の絵画的小品より

どの作曲家でも、その作品と人物像が纏った空気感があると思いますが、今日取り上げる作曲家たちが、どちらかといふと、フランスの中でもパリという大都会の空気を纏っている趣だとしたら、このエマニュエル・シャブリエは唯一、フランスのもう一つの大きな魅力である“田舎”的空気を纏った作曲家ということができるでしょう。パリから南へ400kmほどに位置するオーヴェルニュ地方は、休火山や湖や牧草地など豊かな自然に富み、ミネラルウォーターのウォルヴィックの産地としても有名です。そんな土地で生まれ育ったシャブリエの代表的なピアノ作品である「10の絵画的小品」は、文字通り彼の生地の風物や情景に根ざした音画集で、その最後に置かれているのが、今日お聴きいただくスケルツオ・ワルツです。光や風、素朴な喜びと言った世界観をお楽しみください。

・ドビュッシー（1862～1918） 亞麻色の髪の乙女～前奏曲集第1集より アナカプリの丘～前奏曲集第1集より

クロード・ドビュッシーはラヴェルと共にフランスを代表する作曲家の一人として広く名の知れた存在です。1909～10年に掛けて作曲された、24曲が12曲ずつ二つの曲集に分かれた「前奏曲集」はドビュッシーの代表作の一つです。全ての曲の末尾に控えめにタイトルが記されていますが、それぞれの曲を聴くとそのタイトルは大変納得のいくものであることが感じ取れます。今日はその中から、スコットランドの詩にインスピレーションを得た、「亞麻色の髪の乙女」と、南イタリアの地中海に浮かぶ有名な観光地であるカプリ島にインスピレーションを得た、アナカプリの丘をお聴きいただきましょう。

・ドビュッシー（1862～1918） アラベスク第1番

もう一つのドビュッシー作品は、「アラベスク第1番」です。この曲の出だしを聴かれると、タイトルは思い浮かばなくても、「この曲は聞いたことがある!」と思われる方も多いのではないでしょうか?アラベスクという曲種は、ピアノの親しみやすい小品のジャンルとして知られ、多くの作曲家がこのタイトルで名作を残しています。元々の意味は、アラブの幾何学的な美しい文様の数々、を表す言葉です。ピアノで綴られる、美しい文様の姿をお楽しみください。